

This Page Is Inserted by IFW Operations
and is not a part of the Official Record

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images may include (but are not limited to):

- BLACK BORDERS
- TEXT CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- FADED TEXT
- ILLEGIBLE TEXT
- SKEWED/SLANTED IMAGES
- COLORED PHOTOS
- BLACK OR VERY BLACK AND WHITE DARK PHOTOS
- GRAY SCALE DOCUMENTS

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

**As rescanning documents *will not* correct images,
please do not report the images to the
Image Problem Mailbox.**

④ 日本国特許庁 (JP) ① 特許出願公開
公開特許公報 (A) 昭61-6097

④Int.Cl.
 B 63 H 1/36
 A 63 S 35/00

識別記号 廷内整理番号
 7817-3D
 6547-2C

公開 昭和61年(1986)1月11日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全3頁)

②発明の名前 推進用尾ひれ

①特許 昭59-125718
 ②出願 昭59(1984)6月18日

②発明者 藤田 紀一 大津市日吉台4-14-12
 ②出願人 藤田 紀一 大津市日吉台4丁目14-12

明細書

1. 発明の名称 推進用尾ひれ
2. 特許請求の範囲
 1. 所要尾ひれの、両側面邊との外側を成形したひれ特に、船帆を帆を推進することを特徴とする、推進用尾ひれ。
 2. ひれ形状、外見性のものである、特許請求の範囲第1項記載の推進用尾ひれ。
 3. ひれ形状、外見性のものであって、側面邊の側面邊を突起する細い付け具を有するものである、特許請求の範囲第1項記載の推進用尾ひれ。
 4. 船帆を帆を、ひれ先では側面邊内へ突起し後方へ盛るにしたがって、逐次、改めて突起したものである、特許請求の範囲第1項記載の推進用尾ひれ。
 5. 船帆を帆は、裁断して、細い付け具を有する、特許請求の範囲第1項記載の推進用尾ひれ。
3. 発明の詳細な説明

(技術上の特徴分野)

小舟・保育艇・駆逐艇等の舟艇類を、水中で走行する尾ひれに使って、堅快に巡航せしめるための推進用尾ひれである。

(従来の技術)

舟艇類の先を、板状のひれに直角し、水を横切って推進するものがちつた。

舟艇類の先に、板状のひれを所要の遊びをつけて格好し周回しながら、推進するものがちつた。

舟艇類の先に、外見性の板状ひれをつけ、水を通りながら、推進するものがちつた。

(発明が解決しようとする問題)

一体化された状態のひれや外見性のひれは、直角して、水中を周回するため、抵抗が大き過ぎる。規定される船の航行の2分の1~3分の1が、ひれの凹凸やボウリビット等でされ、推進に供される性能を損失していた。

ひれの面は、波浪障害の効率化になるため効率が悪かった。

細断したひれを上下に周回する場合には、ひれ

の表面が、重りのため浮上や沈下するものは、回転が範囲に出来なかつた。

抱き部・ストッパーに組んで大きな力が加わり、故障の原因になつた。

ひれが大きくなると、必要な速度は増加するので、異常になつた。

以上の場合によって、推進効果は良くなかつた。

(回転を加えるための手段)

使用の模式のひれを廻し、所要加ひれの、両と両側面との外筋を形成したひれ形状に、船体を傾斜したものを利用する。

(作用)

三方を固定した時は、船体により水の抵抗を受けて、ひれ先より固定されていない後ろの方へ、依次大きな円錐状の内腔を作る性質がある。

この内腔で水を貯えるため、没落回数が同じ形状のひれより効率は良くなる。

この内腔は、ひれの回す方向に対して、前傾し水面で出来ているため、進入作用で船速が出来る。

この内腔の効果は、航跡する船の速さ加減、特に

特許第61-6097(2)

つけた種の位置や形により、計画的に、船体の内腔・ラッパ状の取りをもたらすことが出来。

この内腔は、船の死反で船やかに反転し、逆行に対応する内腔を作る。即ち、死点に近づいた時の動きが停止すると、水をはらんで反転していく船を離は、船体を離されて浮遊状態になる。今まで説明されて船の速さと方向性を考えられた時は、船は止まらない。この内腔は、船の反対側にかかる力で、船の反対側にかかるひれの反対側にかかる力で、反転した内腔をもたらす。故に、船の逆行は船速の向上に供することが出来る。

以上の作用の結果により、往來のものより常に船速を良くすることが出来る。

(実施例)

この実施の新規を、更に詳しく図面を参照しながら説明する。

第1図は、この実施の第1実施回数の1例を示す平図面である。

ひれ舟1は、所要加ひれの、両2と側面3と

3の外筋を形成したもので、船体3に取り付け、一体となし、平面方向に並れるものである。又は、ピストン駆動するものである。

このひれ舟に、船体を軸4を旋回して推進用舟ひれとする。

第2図は、この実施の第2実施回数の1例を示す平図面である。

第1実施例のひれ舟1を、伸張性ひれ舟1'としたもので、船体止時に船体を軸4が伸張された状態であるが、船体により、円錐状の内腔を作ると共に、ひれ舟の両端3、4の動きを抑め、内腔のあちが出来にくし、進路のたてで船体を軸4を伸張するものである。第1実施例と比較すると、船体を軸4は、所要の内腔が出来にくく、水を貯えるが、船体面の重さにより逆に船速作用は内上する。

また、船体の並列に応じて内腔面の傾斜が変化する。

第3図は、この実施の第3実施回数の1例を示す平図面である。

ひれ舟1は伸張性であって、その船口部の両側面3、3を脱離するワイヤー6と船の付けねじ7を設け、任意船口部の巾を小さくすることが出来るもので、即ち、収束した船体を軸4が所要加する事とが出来る。

第2実施例と異なる作用点は、船の死反で、たるみもった船体を軸4は、船体を離かれ浮遊状態になり連続するまでの間で、ひれ舟1の反対側にかしやられ、内腔の頭が反転するため、全船逆行を船速の向上に供する事が出来る。

第4図は、この実施の第4実施回数の1例を示す平図面である。

ひれ舟1に、船体を軸4を、ひれ舟2では側面3、3両方へ張り出し、前方へ更に近づいて、並次、ゆるめて収束したものである。船体の並列に傾斜なく、計画した内腔の断面部をもたらす、第5実施回数と同じ船速作用をする。

第5図、第6図、第7図は、この実施の第5実施回数の数例を示す平図面である。

第1、第2、第3、第4の実施回数の実用した

形状を表すに、所要形状の図8を入れることによ
り、ひれの後面 分に応じて並げることが出来る。
内壁の面が外側の形状となす最も優れた揚水
作用を発揮する。

〔初期の 練〕

三方を固定した状で構成したひれの形状、内張
状の内壁を滑らかに水を捉えるから、平板状ひれ
より効率が高い。

内壁の面は、滑らかに斜めに傾斜して運動する舟
であるから、方内性に優れた揚水作用をする。

この内壁は、船体の形状で、速やかに変化しき
る。従而行はるる、船の航行に応じた内壁を構成する。ひれの
ひれの出しに並げる抵抗力は、ひれ舟に分散され、
船頭部化ストッパーのような機能がない。

内壁の面は、計画的に変えることが出来る。

船頭が非常に簡単、操作装置の取り付けが容易
かつ堅便である。

4. 船頭の簡単な説明

図1図は第1実用新案を示す平面図

図2図は第2実用新案を示す斜面図

特許第61-6097(3)

図3図は第3実用新案を示す斜面図
図4図は第4実用新案を示す斜面図
図5図、図6図、図7図は第5実用新案を示す
平面図である。

1……ひれ舟、1'……船頭性ひれ舟、2……船
頭、3……斜面、4……船頭を表す、5……船頭体、
6……ライヤー、7……船頭船体ねじ、8……船

特許出願人 鈴木紀一

